

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その 13

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスそして世代間伝達からの脱却

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q において、シンジは再び大きな悲劇の引き金をひいてしまった。そのことに深い絶望に瀕したシンジは第三村での温かい人間関係のなかで希望をもつ。そして綾波の死により、彼の心は動揺するが、父親との対決という新たな局面へと彼を突き動かす。この出来事は、シンジが依存してきた人間関係から離れ、自らの力で生きることの大切さを悟るきっかけとなり、心理的な成長を促す重要な転換点となる。

→それが父と対峙（エディプスコンプレックス）である。

綾波の死後、再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、まもなく、ヴンダーはネルフ本部に対し、総攻撃は失敗し、アスカも亡くなってしまう

その後、シンジは紆余曲折を経て、エヴァに再び乗り、ゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

NERV とヴンダーの違い

項目	NERV	ヴンダー
目的	人類補完計画の実現	人類補完計画の阻止
性質	秘密主義、軍事組織	反NERV組織、機動性重視
リーダー	碇ゲンドウ	ミサト・カツラギ
価値観	個の消滅、全体主義	個の尊重、多様性

7. シンジと父との対峙 父殺し

シンジはエヴァを通して対峙する。その中で二人はぶつかり合いながらも交流をしていく。

2) 父と対峙しぶつかるシンジ

シンジは、追憶の世界で対決を繰り返すが、全く敵わない。父を倒そうとする

シンジに対し、ゲンドウは「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と告げる。この言葉は、シンジの行動が的外れであることを示唆している。大切なのは、現実的に父を倒すことではなく、自身の内的な父親像を乗り越え、現実で父的な存在に恐怖を抱かず、お互いを深く理解し、認め合い、対等な存在でいられるようになることである。

ここで、シンジは、「うん。父さんと話がしたい」というが、これは心の成熟の一步を踏み出そうとしていることを示している。

この「父さんと話がしたい」という言葉には、単なる会話の意図だけでなく、より深い意味合いが込められているように思われる。彼は今後、ゲンドウに対して「父さんは、ここで何がしたいの？」「父さんは何を望むの？」「父さんのことが知りたいから。」といったシンプルな質問を投げかけることで、父親の真意を深く理解しようとしている。

しかし、ここでの「知る」という言葉は、単に情報を得たいという軽い気持ちではなく、シンジの強い覚悟を示す言葉であるように感じられる。シンジは、父親との対話を通じて、これまで知らなかった衝撃的な事実、例えば「父ゲンドウが母のユイやゲンドウ自身に夢中でシンジには関心がなかった」といった真相

に直面する可能性も孕んでいる。

このような強い覚悟を持って、シンジは父親との関係を深く掘り下げ、自らの存在意義や父親の本当の姿を明らかにしようとしているのではないだろうか。

3) 父との対話 アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

ゲンドウは妻ユイの死という不可逆な喪失に直面し、その悲しみを受け入れずにいた。これは、ボウルビィの言う悲哀の心理過程における「思慕と探求・怒りと否認の段階」に該当する。そしてゲンドウは、人類補完化計画を通じてユイとの再会しようとする躁的防衛の心性が働いている。

一方、シンジは、ゲンドウとは異なる形で喪失を経験し、その中で成長を遂げます。第三村の人々に抱えられ、綾波の死など、数々の別れを経験する中で、シンジは悲しみを受け入れ、前に進むことを学びます。

ゲンドウが創り出そうとする世界は、「A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界。」という様に、一見理想的

ですが、それは個人の感情や差異を否定する、ある種の「死の世界」である。シンジは、そんな行動に暴走する父を止めるために対峙する。

しかし、シンジはゲンドウの中に、自分と同じ孤独や悲しみを見出し、シンジは過去の自分と重ね合わせます。

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃないくて、渡すものだったんだね。父さんに。僕と同じだったんだ。父さんも」

シンジはゲンドウの過去に触れ、その心の奥底にある孤独と悲しみを理解する。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。

4) 父の内的世界 人類補完計画とは？

ゲンドウの孤独と喪失、そして人類補完計画

ゲンドウは幼少期から孤独を好み、人と深く関わることができなかった。ユイ

との出会いが唯一の心の支えだったが、彼女の死はゲンドウに深い傷跡を残し、彼はその悲しみから逃れるように人類補論計画という壮大なプロジェクトへと突き進んでいく。この計画は、分離を拒否し、一つに融合させることで、ユイとの再会を叶えようとする、いわば「肛門期の固着」の状態と考えられる。

ゲンドウとシンジの対話と世代間の連鎖

ゲンドウとシンジの対話を通して、二つの世代に渡る心の傷が浮き彫りになっていく。シンジは、ゲンドウの孤独と悲しみを理解し、彼を責めることなく、温かい眼差しを向ける。この対話は、世代間で繰り返されてきた心の傷に、ようやく終止符を打とうとする試みとなっている。

ゲンドウの贖罪と成長

ミサトから託されたガイウスの槍を手にしたシンジの姿を見たゲンドウは、息子が成長したことを実感する。そして、自身の過去を振り返る。ユイを再構成するためにシンジを利用した過去、そして息子を愛せない自分自身を深く悔み贖罪の念を抱く。

ゲンドウは、これまでシンジを単なる「手段」であった。しかし、シンジに自身の思いを受容され、成長したシンジの姿を再認識する中で、彼は初めて、シン

ジを自分とユイとの息子であると受け入れ、ゲンドウは

「そうか、そこにいたのか——ユイ」

と言ったと考えられる。

ゲンドウの心性は、妄想分裂的ポジションから、抑うつ的ポジションへと変化である。彼はユイの喪失を受け入れ、シンジの中にユイの姿を重ねることで、彼はようやく心の安らぎを見出したと考えられる。

→そこで、シンジの父への思いは整理されたからか、父はトボトボと電車から降りていく。

一方で、電車は、ある種シンジが今後進むべき将来を象徴している様に感じられる。シンジは、父に受け入れられたい思いがある一方で、今まで圧倒的に強大な父親像に押しつぶされそうになっていたと考えられる。しかし父と深く交流する中で、シンジは父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づいた。父親が電車から降りたということは、もうシンジにとって強大な自身を圧倒する様な父親ではないと感じられる様になったことを意味している様に感じられる。そしてそれこそが、シンジの心の中での父親殺しになったと

考えられる。

8. アスカ、カヲル、綾波の魂の浄化

カヲル「碓ゲンドウ、彼が今回の補完の中心、円環の元だ。ここからは僕が引き継ぐよ、碓シンジ君。君は何を望むんだい？」

シンジ「僕はいいんだ。辛くても大丈夫だと思う。僕よりも、アスカやみんなを助けたい」

カヲル「そうだった、君はイマジナリーではなくリアリティーの中で、既に立ち直っていたんだね」

父との深い交流を経て、エディプス葛藤を乗り越え、心的にシンジは成熟したと考えられる。シンジは、その後、亡くなってしまったアスカ、カヲル、綾波の魂の救済の作業に乗り出そうとする。

それはシンジ自身にとって、父と同じ様に彼ら彼女らと深く情緒的に関わる

中で、喪の作業を成し遂げていくことである様にかんじられる。

1) アスカの場合

アスカの過去が語られる。アスカはいつも周囲に対して強がっていたが、実際はシンジと同じ様に孤独な世界で、もがき苦しみ、誰かと深い交流を望んでいたか弱い少女であったことが明らかになっていく。

アスカ「パパは分からない。ママもいない。だから、誰も要らないのよ、アスカ」

アスカ「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」

アスカ「エヴァに乗る」

歯を食いしばって、訓練を積み、実験に耐えるアスカの姿。

アスカ「人に嫌われても、悪口を言われても、エヴァに乗れば関係ない。他に私の価値なんてないもの」

アスカ「誰も必要としない、強い体と心を持つ。だから、私を褒めて！ 私を認めて！ 私に居場所を与えて！」

少女時代のアスカは、見知らぬ家族が幸せそうに笑っている光景を見た。駄々をこねて母親に抱かれたのはシンジだった。若かりし日のゲンドウとユイに守られている。

アスカ「ほんとは寂しい。ほんとはただ、頭を撫でて欲しかっただけなの」

倒木の上で泣きじゃくる少女時代のアスカに、あのパペットと同じ格好をした着ぐるみが近づく。彼女の隣に座った着ぐるみは、幼い体で手袋をはめたまま涙を拭っているアスカの頭を撫でた。

着ぐるみが、おもむろに被り物を外した。それは相田ケンスケだった。

ケンスケ「いいんだ。アスカはアスカだ。それだけで十分さ」

アスカは涙に濡れた瞳を見開いた。

浜辺でアスカは覚醒する。アスカは横たわっていた。

アスカ「私、寝てた？」

アスカは夜空に向かって呟いた。そして傍らに座っているシンジに気づいた。

アスカ「バカシンジ」

シンジ「よかった。また会えて。これだけは伝えておきたかったんだ」

シンジは膝を抱えて、優しい眼差しでアスカを見下ろしていた。落ち着いた声で言う。

シンジ「ありがとう。僕を好きだと言ってくれて。僕も、アスカが好きだったよ」

アスカ「――」

アスカは身をよじって、シンジに背中を向けた。

シンジ「さよならアスカ。ケンスケによろしく」

【考察】

ここでアスカの過去を言及した自身の独白から始まる。その中でアスカは両親がいない天涯孤独な世界で生きてきたことが語られる。「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」とアスカは語っているが、これはエヴァの序の冒頭部のシンジの心性と同じ様に傷つかない様に自己愛的な殻を作っていた。そして「お前バカァ？」見下されない様にひたすら努力を重ねてきた。けれども本当は孤独で、自分の思いをきちんと受け止めて欲しかったのだと思う。しかしそれができず攻撃的な言葉を発し続けてしまう、まさにヤマアラシのジレンマであった。

エヴァの破でシンジとアスカが同じ布団で寝転んで、交わした言葉の中で、エヴァに乗る意味について語られたとき、シンジが

「父さんに褒めてほしいのかな？今日は、初めて褒めてくれたんだ。初めて褒められるのが嬉しいと思った。父さん、もう僕のこと認めてくれたのかな？ミサトさんの言ってた通りかもしれない」

と話しているが、それはアスカ自身も感じていたことであったと考えられる。深く同じ心情を感じていたからこそアスカはシンジに惹かれていったと考えられる。そして随所でアスカはいつかシンジに助けて欲しいと感じ続けたのだろう。そして成熟したシンジは「ありがとう。僕を好きだと言ってきて。僕も、アスカが好きだったよ」と話す。それはこれまでアスカがシンジに、深く自分の心を理解してくれる対象に言って欲しかった言葉であったと考えられる。そしてアスカの魂は浄化されたが、それと同時にシンジのアスカの喪失も受け入れたものと考えられる。

2) カヲルの場合

カヲルはシンジの幸せを考え行動してきたが、なぜ、その様に行動してきたの

かが明らかにされる。

シンジ「思い出したよ。何度もここに来て君と会ってる」

カヲル「生命の書に名を連ねているからね。何度でも会うさ。僕は君だ。僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。幸せにしたかったんだ」

シンジ「そう、カヲル君は父さんと似てるんだ。だから同じエヴァに乗っていたんだね」

NERV のピアノのある場所でシンジはカヲルと横に並んで、夜空を眺める。

カヲル「なんだかいつもと違うね、シンジ君。泣かないのかい？」

シンジ「うん。涙で救えるのは自分だけだ。僕が泣いても、他の誰も救えない。だから、もう泣かないよ」

カヲル「そうか、君はもう成長してたんだった。少し寂しいけど、それもいいね」

シンジ「カヲル君、第 13 号機、君のエヴァも処分しようと思う」

カヲル「うん。エヴァを捨てるか——。すまない。僕は君の幸せを誤解していた」

加持「ええ、それはあなたの幸せだったんです。渚司令」

加持「あなたはシンジ君を幸せにしたいんじゃない。それにより、あなたが幸せになりたかったんです」

カヲル「僕の存在を消せるのは真空崩壊だけだ。だから僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」

幼きシンジ「仲良くなるおまじないだよ」

幼少の無垢な声でシンジが言い握手を求める。カヲルは涙を流して、その手を握り返した。

カヲル「相補性のある世界を望む。変わらないな、シンジ君は」

加持「だからこそ、あなたが彼を選び、生命の書に名を書き連ねた」

カヲル「ありがとう。リョウちゃんにも救われたよ」

加持「光栄です。渚司令」

カヲル「嫌だな、リョウちゃん。そろそろカヲルって呼んでよ」

加持「ふっ、まだお預けです。渚司令」

二人は海洋研究所の施設で海を見ている。

加持「渚とは海の陸の狭間。第一の使徒であり、第十三の使徒となる人類の狭間を紡ぐ、あなたらしい名前だ。あなたは十分に使命を果たした。あとは、彼に引

き継いでもらってもいいでしょう」

加持「葛城と一緒に老後は畑仕事でもどうです？」

カヲルは加持と一緒に畑を歩く。

カヲル「そうだね。それもいいね」

【考察】カヲルは「僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。」言っており、後の方で加持は「あなたが幸せになりたかったんです」と言っている。この点からカヲルは自身の内的な心性をシンジに投影し、シンジを幸せすることで、自分の心を癒そうとしていた様に見える。まさにケアテイカーの心性である。その関係性の連鎖を断ち切るにはシンジが成熟し、自立し、シンジがそのカヲルの心を理解し、カヲルの心を受け入れることである。そこでシンジは「僕が泣いても、他の誰も救えない。だから、もう泣かないよ」と言ったのではないかと考えられる。その中でカヲルは「僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」と話し、宿命の中で偽りの自己ともいうべき自身を演じ続け、取り残される孤独感を常に感じていたことが語られる。

そこで幼いシンジが現れ、「仲良くなるおまじないだよ」と言い手を繋ぐこと

を要求する。手を繋ぐということは、親密になることであり、共有し、相手を深く理解しようとする象徴である。そこにカヲルは「相補性のある世界を望む。変わらないな、シンジ君は」と言って涙を流す。相補性とは自分と他者が相異なる部分を持っているが、お互い補い合う関係性である。カヲルはケアテイカーとして完全無欠な存在としてあろうとした（その点、神殺しをし、自身が神になろうとしたシンジの父に似ている。）。しかしカヲル自身も孤独な存在なのである。それをお互い受け入れ合いながら生きていく。そしてシンジにとってのカヲルの役割は終え、シンジ自身も彼の喪失を受け入れたと考えられる。